

まちづくり（自主防災）講演会

『想定外を生き抜く力』

～大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ～

平成23年10月31日（月）19:00～21:20

稲津公民館 ホール

講師：群馬大学大学院工学研究科 社会環境デザイン工学専攻

広域首都圏防災研究センター長・教授 片田 敏孝 氏

参加者数：100人

市長あいさつ

みなさん、こんばんは。みなさんには、それぞれの地域で9月、10月と秋まつりや文化祭等の各種行事を企画・実施していただいたことに心から敬意と感謝を申し上げます。それぞれの事業は地域の活性化・課題解消に大きな成果を上げていただいたと思っている。これからもよろしくお願ひしたい。

本日は、防災の講演会ということで集まっていたわけだが、3月に起きた大震災、そして、7月、特に9月の台風15号では瑞浪市をはじめ、土岐市、多治見市、名古屋市と近隣の地域が大きな被害にあった。私も9月19日～21日と3日間、東北の被災地の視察に行っており、9月20日に七ヶ浜のレスキューストックヤードの栗田さんたちが防災センターを設けているところに表敬訪問させていただいた。当日、今後の話をしている時に、瑞浪が大変な状況になりつつあるので災害本部を立ち上げたという連絡をもらい、それ以降の予定をキャンセルして戻ってきた。幸い新幹線はまだ運転していたが、名古屋から瑞浪への主要道路が遮断されているという状況であった。

やはり、大きな災害では避難することも大変だが、救助に行くのも大変であると感じた。災害が起きてしまったら、やはりそのような状態になってしまうので、災害が起きる前に備えをすることが大切だと改めて認識した。自分自身の判断の甘さも反省したところだが、災害は必ず自分の身にも起こると危機意識を持って片田先生の講演を聞いていただければ、みなさん自身、そして地域の防災力の向上に大きく繋がると期待している。

連合自治会長あいさつ

みなさん、こんばんは。日頃は、瑞浪市連合自治会が市民のみなさまに大変強いご支援とご協力を賜っていることに対して心から御礼を申し上げます。連合自治会としても、市内の防災について大変強い関心を持っている。瑞浪市を襲った豪雨災害では、各地で災害が起こったが、日吉町で起こった災害が全市の9割以上であった。私も当日、市会議員と現地を回ったが、土砂崩れや、道路、田んぼが川になっている状況であった。

先程、片田先生と控室で話をさせていただいた。先生は中津川市の加子母の出身で、今は群馬大学で大変ご活躍されている。先生は、防災のなかでも、災害が起きてからどうするのかということよりも、災害を防ぐためにどうするのかということを中心に研究されて

いるということなので、今日の講演会が大変参考になると期待している。

「災害は忘れたころにやってくる」と言われるように、瑞浪市も決して例外ではない。自分は自分で守るという気持ちを持つことが大切だと思うので、是非、本日の講演を聞いて、そのような意識を持っていただければと思う。

講演 演題 『想定外を生き抜く力』

みなさん、こんばんは。私は、防災で一番大事なことは、「災害ごときで人が死なないこと」だと考えている。阪神・淡路大震災以降、日本の防災は、やられてしまった所をみんなが助けてあげようとする防災ばかりが進んでいる。それは、とても大事なことであるが、もっと大事なことがある。それが「災害ごときで人が死なないこと」である。

3.11の大津波災害は、こんなことがあるのかと思うくらいの大災害であった。でも、私はこういうことがいつか日本でも起きうると考えていた。三陸地域は津波の常襲地域であり、100年くらい前にも今のような状態になっている。にもかかわらず、先人の教えを無視して低い土地に家を建て、避難勧告が出しても逃げないことが常態化していた。こういう状態のなかで、今回のような災害が起き、多くの方が亡くなった。

私は8年前から釜石に入っていた。最初は防災講演会のようなことを何回か行っていたが、防災意識の高い人しか来ない。地域全体に防災をどのように広めていくかを考えた時に、一般的な講演会を繰り返してもだめだと思った。

そこで考えたのが、子どもたちへの防災教育。子どもは社会に与えられた環境のなかで生きていく。ところが、子どもたちが生きている環境は、子どもが逃げることを親が「今回も津波なんか来ない」と言って止めるような状況であった。社会が津波に対して無防備な状態で子どもが育っていた。このままでは次の津波でこの子どもたちは生き残れない、そういう思いで、子どもたちへの防災教育を始めた。子どもたちは10年経てば大人になる。もう10年経てば親になる。津波防災を心得た親が次の世代に語り継ぐ。こうして津波防災が地域の災害文化として根付いていく。私は子どもたちに教育しながら地域に災害文化を醸成させ、地域に貢献したいと思い、10年一区切りで防災教育を計画していた。しかし、8年目にしてその時が来てしまった。

釜石市でも1,100人の犠牲者が出てしまった。防災の研究者としては敗北だと思っている。「釜石の奇跡」と褒めていただいている部分もあるが、私は、そのようには思えないし、そのように言われることは不本意でもある。そんななかで、子どもたちへの防災教育の効果だけは確認できた。14の小中学校で3,000人の子どもたちが、ほとんど生き延びてくれた。地域のなかで子どもたちが亡くなると、地域が立ち直れなくなる。よく生き延びてくれたと思う。しかも、この子どもたちは、自分たちが生き延びただけでなく、逃げる途中で施設のお年寄りの車椅子を押しながら、あるいは、保育園の子どもを抱き抱えながら走って逃げている。この子どもたちのことは、とことん褒めてあげたい。そして、なぜ子どもたちがこのような行動をとれたのかを、みなさんにお話したい。

その根底にあることは、「明らかに今の日本の防災は間違っている」ということ。今の防災は、他人任せ、行政任せである。自分の命を守ろうとした時に、主体性というものを欠くことが出来ない。要は、「自分の命は自分で守る」という当たり前のことであるが、この真髓がどこにあるのかをお話したい。

まず、最近の自然災害を概観してみる。そこからいえることは、最近の気候は何かおかしいということ。台風12号、15号、少し前には新潟豪雨があった。この地域で心配しなければいけないことは、間違いなく気候変動に伴うゲリラ豪雨や台風の巨大化である。台風15号は、日本の近海で気圧が下がり、台風が強くなって北へ上がっている。最近の台風は、今までの台風の動きと違ってきている。それと、1回で1,000mmを超えるような雨があちこちで降っている。これだけの雨が降ると、深層崩壊という現象が起き、山が根こそぎ崩れてくる。その結果、土砂ダムと言われるものが出来てしまう。深層崩壊は高く急傾斜のある山なら、どこでも起こりうる。

これまでの台風は赤道辺りで起こるのが通常であったが、地球温暖化が進み、日本の近海で起こるようになった。この東濃地域に影響を与える確率が非常に高くなっているのが現状である。そういう意味では、市にも防災体制をしっかりとっていただきたいが、守ることができる限界に来ている。だから、市も住民も頑張るしかない。とにかく、これまでのように行政が何とかやってくれと思っていると間に合わない。

自然のことだから、災害が起きるような雨を止めることはできない。しかし、被害を出さないような地域づくりをどうするのが重要となってくる。この地域も土砂災害警戒区域に関する情報が出ると思うが、このようなものを見ながら、どこが危ないのか、どういう早期の警戒体制をつくっていかなければいけないのかを考えなければいけない。最近の豪雨は、あまりにも局所的すぎて役所で把握できないこともある。役所からの情報を待っているだけでは手遅れになる。

このようなことを踏まえて、私が群馬県で取り組んでいるのは、もちろん役所からの情報はいち早く貰えるようにするが、地域のみなさんに公民館に集ってもらい、土砂災害警戒区域図に、ここ最近の大雨の時に普段と違う現象がないかを聞き取っている。そうすると、これまでの災害経歴のなかで、土砂災害が起きそうなときにどこがどうなるのかを地域のみなさんは知っている。それを地図のなかに全部書き込んで、みなさんと共有し、新しい情報は区長に連絡する。そして、区長が避難指示を出すようにしている。もちろん、行政からの情報も使うが、地域のことは少し離れた市役所では、わからないことが多い。市役所でもいつどこで起こるかわからない土砂災害に対しては、こうした地域での自主避難体制の確立といったことが重要となる。

私は、釜石の中学生に「中学生は助けられる立場じゃない。助ける立場だ。」と話していた。子どもたちは、お年寄りをリヤカーに乗せて逃げる訓練もしていた。ただ、実際、地

震が来た時には、正直「助けにいくと死んでしまう」という思いもあった。

～大震災の映像～

子どもたちに防災をどう伝えていくかということの前に、私たち自身が防災というものをどう考えているのか、また、日本の防災の問題点はどこにあるのかを、しっかりと腹に置いて、明確なスタンスで子どもたちに接しないといけない。

釜石には、世界一の防波堤があり、釜石湾全体を塞いでいた。その堤防を30年間かけて造っていた。それが全部破壊された。それは、「想定外」と言いたくなる。でも、「想定外」という言葉の裏には、「想定外だから仕方がない」というような逃げ口上が入っているようではない。本当に「想定外」だったのか。

相手は自然であるから、どんなことだってありうる。自然の営みを考えるならば、今回の大津波も「想定の内」である。でも、とてつもなく大きな災害を防災の世界に持ち込んでくると、「諦める」という言葉しかなくなる。無尽蔵に大きな災害を防災の世界に持ち込むのは無意味である。そう考えると、防災というのは、「これぐらいの範囲は何とか守ろう」とするもの。つまり、防災というのは、防御の目標を定めて、その目標までは守りきろうとするが、一方でそれ以上の規模のものは守ろうとしていないという事実気づくべきである。

日本は災害大国であり防災先進国でもある。治水関係者は、だいたい100年確率で、人の一生に一度あるかないかの災害に対する防災設備を考えている。100年という月日は、25歳で結婚して第1子が生まれたとすると、4世代までの範囲となる。津波については、100年確率ではなく、過去が一番大きな津波を想定して防災設備を考える。釜石の防波堤も過去の津波を想定して造られた。この防波堤が出来た翌年に講演会を開いたが、防波堤が出来たことで市民は安心していた。これはまずいなとそのとき感じたが、実際、逃げなかった人がたくさんいたと聞いている。新聞には、「想定外だった」「想定を超えた」と書いてあった。日本の防災の問題点はここにある。

日本は、これだけの防災力を保ってきたために、自然を制圧できるものと勘違いしている。無尽蔵に防波堤を高くすることについては、反対である。国民の安全レベルを高めることは悪いことではないが、設備を良くすることで生まれる依存心をフォローしないままでは、人間側の弱さがどんどん出てくる。ここに日本の防災の危険がある。防御のレベルを上げると、防災の依存度が高まる。つまり、災害過保護になる。具体的には、治水を考えると、100年確率で堤防をつくと、確かに水害は減る。堤防がなかった昔は、地域の人たちが協力して水害を乗り切っていた。堤防ができたことで、地域の共同体意識は減り、水害に対して無防備になっている。その状態に襲いかかるのが、100年確率を超える大きな災害ということになる。

人為的に高める安全は、人間のぜい弱性を高める。今回の災害、想定外なのか、想定が甘かったのか、違う。想定というものにとられすぎた。あれぐらいの堤防を造ったから大丈夫だという想定にとられすぎたということ。それは、ハザードマップにも表れてく

る。釜石は、明治三陸津波を想定してハザードマップを作成していた。このハザードマップを皆さんに配った時に何を思うか。まず、自分の家を探す。そして、危険区域に入っているかどうかを確認する。今回、釜石市で亡くなった人の多くがハザードマップの危険区域と想定していたところを境界線にして、危険区域以外のところで亡くなっている。なぜ、このようなことが起こるのか。ハザードマップの危険区域以外は安全を保障されたと勘違いしてしまっている。ハザードマップは単なる一つのシナリオに基づき作成されたものに過ぎない。人間の勝手な想定の中に自然が従ってくれるわけがない。何でも想定範囲におさまると考える、ここを正さない限り、日本の防災は良くなる。

それから、各地のお年寄りの方と話す機会があるが、過去の経験を災害の最大値に規定してしまっている。行政が何とかしてくれると思っている人も多い。これで自分の命を守る主体性が生まれるわけがない。このような環境で子どもたちは育っている。日本は幸せな国で、子どもたちは家庭、地域、学校に守られている。そんな状況で子どもたちに「自分の命は自分で守れ」と教えなければいけなかったのである。

新聞は、「釜石の奇跡」と書きたてたが、子どもたち5人が亡くなっている。

5人のうちの2人は学校を休んでいた。子どもの命を守る時に、学校の防災教育に任せきりになりがちだが間違いである。子どもが学校にいる時間は、365日のうち、24時間ずっと学校にいると仮定すると、50日ぐらいである。残りの時間は家庭と地域である。学校、家庭、地域、この3つをリンクさせて子どもを守らないと上手くいかない。

3人目は、逃げている途中で親御さんが迎えに来て亡くなっている。これからまさに災害が起きるといふ時に子どもを迎えに行くのはやめていただきたい。親のエゴである。子どもが心配になるのは分かるが、子どもの受け渡しにかかる時間は、学校に残っている子どもたちが避難する貴重な時間を浪費させている。

4人目は、家庭の事情でお父さんと暮らしている子が、学校を早退してお母さんと買物をしている時に亡くなった。

5人目は、一人暮らしのおばあちゃんが心配で、一緒に逃げる用意をしている時に発生した余震で亡くなっている。この子については、やりきれない気持ちでいる。子どもたちに「君たちは守られる立場ではない、守る立場だ」と言ったことを実行して亡くなってしまった。

この5人の子どもたちの命を守ってやれなかったことについては悔しくてならないし、そのことを心に留めてこれからの防災に取り組みたいと思っている。しかし一方で、自らの主体的な行動で命を守り抜いた3000人の子どもたちに対しては褒めてあげたいと思っている。以下では、大津波から生き抜いた子どもたちのその時の行動、その背景にあった防災教育についてお話したい。

私が釜石市の子どもたちに教えてきた津波防災教育は「避難三原則」に集約される。「想

定を信じるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」である。

まずはじめの「想定を信じるな」、平たく言えば「ハザードマップを信じるな」ということである。私は、釜石市での津波防災教育のはじめで、津波ハザードマップを子どもたちに配った。子どもたちにハザードマップを配ると、やはり自分の家が危険区域か区域外かで盛り上がっている。しかし、それは過去の津波を想定したものであり、次にくる津波がこれより大きいかもしれないと言うと、子どもたちはしっかりと理解をしてくれる。そして、ある子が、「小学校も中学校も危険区域外だけど、川が近いし、危険区域の側だから危ないよ」と言った。この言葉が、後で大きな意味を持つことになった。

日本の子どもたちは、学校教育のなかで先生が言った言葉は常に正しい、教科書には間違いがないという知識獲得型の教育を受けている。ハザードマップを配ると、危険区域外なら大丈夫だと思い込んでしまうこと、それから、ハザードマップ通りに津波がくると想定を固定してしまっている自分に気づいてほしかったのである。

次に「最善を尽くせ」。相手は自然なのだから、どんな津波がくるかわからない。しかし、どんな津波が来ても、その時できることは、自分の最善を尽くし命を守り抜くことだけ。それが自然と向き合うということだと教えた。

3月11日、釜石東中学校では、もの凄い揺れのなか、教頭先生は放送室まで這いつくばってたどり着き、マイクで子どもたちに「逃げろ」と言おうとした。立ち上がって校庭を見ると、子どもたちは既に避難行動を始めていた。

一番最初に行動したのはサッカー部で、もの凄い揺れの後、地割れがしたので校舎に向かって「津波が来るぞ、逃げろ」と叫んだ。そして、そのまま駆け出して鵜住居小学校の校庭の前を横切り、校舎に向かって「津波が来るぞ、逃げるぞ」と大声をはりあげて、そのまま御在所の里へ走った。中学生が、その声に気づいて次から次へと降りてきて、みんな鵜住居小学校を横切り、「津波が来るぞ、逃げるぞ」と叫びながらどんどん逃げていった。

鵜住居小学校は鉄筋コンクリートの3階建てで、つい最近、耐震補強が終わったばかりだった。ハザードマップの危険区域外、しかも当日は雪が降っていた。これだけの条件が揃っていたので、小学校の先生は子どもたちを3階へ誘導した。普通に考えれば、当然である。下手をすれば避難所に成り得る。

ところが、この2つの学校は日頃、合同避難訓練をしていた。小学生にすれば顔見知りと一緒に避難訓練をしている中学校のお兄ちゃん、お姉ちゃんが、「津波が来るぞ」と言って走って逃げていくのを見て、先生が3階に誘導しているなか、後ろの方の子は校庭に逃げて行った。先生も迷いながら600人の小中学生と、もう一段高いところにある“ございしよの里”を目指して避難した。

それだけではなく、この中学校の子どもたちは普段、一人暮らしのお年寄りの家に行って「何処に逃げるか分かる?」「逃げられなかったら言ってね。リアカーで行くから」というような声を掛けていた。そんな頼もしい中学生が逃げているから、お年寄りも巻き込まれるようにして逃げて行った。

それから、鵜住居保育園でも小中学生が逃げていくのを見て、保育士さんも不安になって0歳児をおぶったり、ベビーカーに乗せて坂道を上がって行った。それを見つけた中学生が次から次へと園児を抱っこして、みんなで“ございしょの里”に逃げ込んだ。

600人の小中学生とお年寄り、保育園児が“ございしょの里”に逃げていたが、そのうちの中学生在が、裏の崖が崩れているのを見つけて、「先生、ここじゃだめだ。もう一段上のデイサービスセンターへ行こう」と声を上げた。そして、さらに一段高いところにあるデイサービスセンターを目指して、みんなで走り始めた。子どもたちがみんな駆け込んだわずか30秒ほど後に津波がデイサービスセンターの手前裏まで押し寄せた。

子どもたちの「ここではだめだ」という判断が少しでも遅れたら大変なことになっていた。これ以上何もやれることができないというところまで子どもたちはやり抜いた。ハザードマップ上では安全とされていた小中学校の屋上を津波は超えていた。もし、ハザードマップを信じて子どもたちが小学校に残っていたなら、間違いなく全員死んでいた。

改めて、この2つの「想定にとられるな」「最善を尽くせ」、たったこれだけのことだと思ふ。子どもたちに求めたことは、相手は自然であるということ、そのなかで常に自分の命を守るということに対して主体性を持って、出来る限りのことを一生懸命やっていく姿勢を持つということ、そのなかに命を守り抜いた原泉があると思ふ。

そして3つ目は「率先避難者たれ」である。

人間は、知識を持っていても、それだけで逃げられるものではない。典型的な例は火災を知らせる非常ベル。今、この瞬間に非常ベルが鳴ったら逃げるだろうか。そんな人は見たことがない。人間というものは、自分が災害なんかで死ぬと思っていない。だからこそ、どんな情報がきても、今がその時と思えなくて、なかなか逃げられない。

そんななかで子どもたちには、「まず自分の命を守り抜け」「率先避難者になれ」と言ってきた。子どもたちは、「先生は、自分たちは助ける立場だと言ったのに率先避難者になるのはおかしい」と混乱した様子だったが、「人を助けるためには、自分が逃げて助からなければいけない。まず、自分が生きるんだ」「非常ベルが鳴ったら、君が一番に逃げろ。そうしたらみんなが君についてくる。それが、他の子を助けることになるんだ」というやりとりをした。

私は今、子どもたちに何を教えてきたのかと改めて思う。たいした事は教えていない。津波避難の行動に関しては、「津波が来る前に逃げろ」「津波より高いところに逃げろ」この2つだけである。たいした知識は与えていない。しかし、子どもたちに自分の命を守る姿勢は与えてきたつもりだ。

防災教育には3つある。一番やってはいけないことが、「脅しの防災教育」。これは最初のうちは覚えているが、すぐに怖さは忘れてしまう。全く長続きしない。次に、「知識の防災教育」。学校の先生たちは、知識をしっかりと与えれば合理的な行動を取れると思っているが、違う。さっきのハザードマップを思い出してほしいが、人間は、自分の命が危ないという情報については、まるで理解できない。都合の悪い情報を理解しようとしないうし、

上限値を勝手に想定して災害イメージの固定化を招く。防災の世界では、知識だけでなく、自分の命を守る姿勢を持たなければいけない。すなわち「姿勢の防災教育」である。

人間は、明確に自分が死ぬということを意識しないから幸せであって、それが人間らしいことでもある。私は、防災という世界は自然災害に怯えることではないと思う。自然が豊かで、自然の恵みをいっぱいもらっているということは、時には自然の振る舞いに付き合えないといけないことでもある。でも、自然に怯える必要はない。そのとき災いをやり過ごせば良いのである。最大の敵は自然ではない。いざという時に逃げようとする己である。

釜石の子どもたちには、「人間はこういうものだ」と理解し、その日その時だけ懸命に自らを律して行動を取れる自分であることが、この地に住む「お作法」だ」「これが、ここに住むための姿勢だ」と教えた。

子どもたちが10年教えて大人になり、もう10年教えれば親になり、自分の子どもに伝えていってくれると思っているが、もう一つ欲がある。それは、子どもたちの親である。中学生の親は50年、100年に来るかどうかの津波より、今日・明日の生活の方に追われている。だから、防災講演会を開いても参加するわけがない。その余裕がないのである。でも、そういう親たちでも自分の子どもの事になると違ってくる。

最初の防災教育で、子どもたちに「君が一人にいる時に、大きな地震が来たらどうするか」というアンケートを取った。子どもたちの大半の回答は「お母さんに連絡する」「お母さんを待つ」であった。その回答用紙を家に持って帰らせ、「あなたのお子さんは、次の津波の時に生き延びることができるか」と母親にアンケートをとった。その翌日、学校の津波防災教育に関する問い合わせが相次いだという。こうして母親に津波防災教育の重要性に対する気づきを与えたのである。そうすることで、お母さんと津波から子どもたちを守る共闘体制をつくった。これで、子どもの命を守ることは、学校教育だけでは出来ないから、家庭と連携しなければいけないと理解してもらった。

津波防災教育の最後の授業で「君たちは絶対逃げてくれると思う。でも、君たちが逃げた後で、お母さんはどうするだろうか」と問いかけた。子どもたちは一斉に顔を曇らせた。子どもたちは、お母さんは自分の事が大事だと思うから絶対に迎えに来ると確信していた。迎えに来てその先に起こることを子どもたちは想像していた。そんな子どもたちに、家に帰ったらお母さんに「僕は絶対に逃げるから、お母さんも逃げて」とわかってくれるまで言うように話した。

その裏では保護者会を開き、お母さんたちに、子どもたちは自分たちが逃げることについて一生懸命話さだろうと伝えた。そして、お母さん自身が、自分の子どもは絶対に逃げると確信したら、「ちゃんと逃げなさい。じゃあ、お母さんも逃げる」と言ってほしいと話した。そして、最後に必ず「後で必ず迎えに行くから」という一言を伝えてほしいと約束

した。

東北地方には、「津波てんでんこ」という言葉がある。津波が来たら、てんでばらばらに逃げろという意味で、表面的にはとても薄情な言葉であるが、子どもをおぶって逃げられるだろうか、お年寄りを担いで逃げられるだろうか。普通はできない。東北地方でこの言葉が残ったのは、家族の絆があるがゆえに一家が全滅するようなことを繰り返していたからだ。一人一人が逃げろという薄っぺらな言葉ではない。「津波てんでんこ」というのは、自分の子どもは絶対に逃げていると確信を持っているから自分も逃げることができるということ。一人一人が自分の命に責任を持つということを家族がそれぞれ信頼し合っている。つまり、普通なら「津波てんでんこ」なんか出来ない。でも、出来るような家庭になれと言っている。

釜石に行って、あるお母さんに「逃げましたか」と聞いた。そのお母さんは、「もちろん逃げましたよ。うちの子は逃げるなど言っても逃げるから」と言ってくれた。これは最大の賛辞であった。ここまで「津波てんでんこ」を理解してしてくれたかと感じた。釜石は全体で1,100人が亡くなっている。その中で、小中学生の親御さんは32人だった。そして、そのほとんどが消防や警察の職責を全うしたためであった。

参観日の後、子どもに通学路の地図を渡し、親子で一緒に帰る際に津波での危険な場所を確認してもらった。その際、子ども一人ではどうにもならないようなところでは、その付近に住まう住民に対し、「地震があったときには子どもがここに避難してくるので、どうか一緒に逃げてやって欲しい」とお願いに行くよう伝えた。それを了承してくれた住民に対しては、そのお宅を「こども津波ひなんの家」に認定するとともに、それを示すステッカーを配布し、玄関に貼りだしてもらった。

そして、「こども津波ひなんの家」の家庭には、子どもたちが駆け込んできたら、「絶対に津波は来ないから大丈夫だと思っても大丈夫と言わないでほしい」、「一緒に逃げてほしい」と伝えた。そして、津波が来なかったら、「津波来なくて良かったね。」と思いきり機嫌良く子どもたちに言ってほしいとお願いした。そして、ここに来たことを褒めてあげてほしいと伝えた。このようにして、津波防災をこの地域に広げたのである。

この地域は、小さな子どもからお年寄りまで一緒に防災訓練を行うようにならなってきた。特に中学生は、助けられる側から助ける側になるために、消防団に消火訓練、救急隊員に救急搬送の訓練を習い、さらに防災マップづくり、お母さんたちを呼んで炊き出しの練習、おばあちゃんに防災頭巾を作ってもらい、過去の津波を忘れないための記念碑の清掃活動等、子どもたちが気づくだけの事をやってきた。子どもたちが懸命に地域の一員として、みんなを守るという意識のもとでやってきたこと、そして、それに地域のみんながちゃんと答えてくれている。これは、防災というよりも、子どもたちは地域全体の宝として育ててくれると感じた。

私は、子どもたちに何度も言っているように先生方にもお願いした。どこでもいろいろ

な災害がある。海であれば津波の危険、山であれば土砂災害の危険、川の近くであれば水害の危険がある。でも、いちいちそんな事に怯えて暮らす必要はない。『自然に近付き恵みをいっぱいもらって生きている。その恵みを享受し、地域の自然を大事にして郷土を愛し、地域を大事にすること。だけど、自然に近づくということは、その地域特有の災害にも当然向い合わなければいけない。その時だけしっかり備える自分であれ』それが、その地域に住む“お作法”だと。

実は、大震災以降、釜石の子どもたちに防災教育を再開できていない。子どもたちが可哀想で、私自身が「津波」という言葉をなかなか出せないところがある。でも、近いうちに再開しようと思っている。そして、子どもたちに「君たちは立派に“お作法”を身に付けたから生き残ったんだ。そして、この“お作法”を次の世代に伝えてほしい。」と話すつもりである。そして、“お作法”を身に付けた子どもたちだからこそ、この地域に生きる資格がある。「君たちの手で、この釜石を前よりも、もっと素晴らしい釜石にしてくれ」と言っていきたいと思う。

3月14日の日に現地に入り、子どもたちに「よく頑張ったな」と褒めたが、子どもたちは興奮した様子もなく、普段通りの感じであった。よく考えれば、7、8年訓練をした子どもたちにとっては、逃げるのが当たり前であった。子どもたちのなかに文化として定着したと思い、うれしく思った。

稲津町区長会長御礼の言葉

長時間にもかかわらず、刺激的な話だった。自分たちの地域は自分たちが知っている。まず、どう逃げるかを考えて生活しなければいけないと思う。この話を参考にさせていただき、自分の地域に合った「助かる防災」を身につけていきたい。

閉会 21:20